



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二一〇号〜

はくろ
白露 九月二十三日



来る福招き猫まつり

“招き猫まつり”で親しまれる「来る福招き猫まつり」が今年第二十一回を数えたと聞いて、早いものだと驚きました。現代作家の新作から全国の郷土玩具、鉛細工までさまざまな招き猫でおかげ横丁があふれるこの催事、以前編集していた雑誌で特集をしたのが、平成十一年（一九九九）十月号のこと。

この時は第五回を迎え、すでに人気が高く、その理由を探ろうというものでした。

当時の特集号によると、そもそも“招き猫まつり”が九月二十九日となつたのは、全国的な招き猫の愛好サークル「日本招猫倶楽部」が“くるふく”と九月二十九日をかけて招き猫の日と制定したことから、伊勢や愛知県瀬戸^{せと}など数か所で始まったとあります。瀬戸でも今年二十四目を迎えますから、“招き猫まつり”は定着したといえます。

『民間信仰辞典』には、招き猫は猫が前足をあげ、頭をかく動作が人を招くように見えることから、商家では正月に買い求め店先に置き、商売繁盛を願うとあります。だるまや福助と同じ縁起物でありながら、猫という身近な生き物であるところに人々は招き猫により惹かれるのではないか、それが人氣の理由だと私は思うのです。

例えば、徳利^{とくろ}と通い帳^{かよ}を持った信楽焼の狸の置物は福を呼ぶといわれますし、お産が軽い^{こゆる}という言い伝えから妊婦の安産や子どもを守ると伝わる犬の張り子、「無事カエル」にひっかけたカエルのお守りなど、私たちの回りに生き物にちなんだ開運厄除けがたくさんあります。

こうした信仰には、生き物に対する尊いや共に生きるという共生の気持ち^{こころ}が日本人には根深くあるのではないのでしょうか。

今年もまた招き猫に福を招いてもらいたいものです。

文 千種清美

